

法義相続

第12組浄念寺門徒 山下 憲二

私の店のウィンドウには、^{てつきでら}手継寺よりいただいた法語が、月ごとに変わって掲示してあります。今月は、相田みつをさんの『過去、無量のいのちのバトンを受けついで いまここに 自分の番を 生きている』という文です。この言葉を多くの人が見ていかれ、いろいろ話をしていわれます。

私も還暦を過ぎると、両親も亡くなり、伯父・伯母も次々と亡くなっていきます。昭和期の厳しい時代に生き、私たち子どもらを育て上げて豊かな生活を送れるようにしてくれた親たちでした。その人生では苦しい事も楽しい事もあったと思われまふ。私の両親は、浄土真宗の教えに熱心な、郡上の山奥に生まれた人でした。母方の祖父は、子どもたちの名前に「正信偈」の経本から漢字一字を取って付けたほどの人でした。晩年の祖父の思い出は、認知症に侵された姿しか思い出がありませんが、雪深い地域での人生を生きただけの人だったのです。毎日朝から「正信偈」と念仏を上げてから仕事に出掛けていったとのことでした。

その祖父の子どもたちは、長男を残して皆都市部に出ていきました。私の父母もそうでしたが、若くして故郷を離れて都市部での生活を選んだのも、苦しい生活から豊かさを求めてのことだったのです。そのような中で故郷の家から大き

な仏壇は持ってこれず、「御本尊」と先祖の位牌のみを持参し、手継寺の転籍と仏壇の購入をしたのです。そのようにして今日まで、ご縁を繋いでいただいた郡上のお寺と今の手継寺との関係があるのです。しかし、そのようなご縁を結ぶことが出来なかった伯父、伯母たちもいたことも事実なのです。どんなに成功して名も財も残した人でも、晩年になると故郷の景色や辛かった時のことを思い出すのでしょうか。ある伯父などは、私に「亡くなった時は、郡上のお寺さんに、故郷にある谷の名前を院号につけて葬儀を頼んでくれよ」と言っていたのを思い出します。

妻や子どもにも言っていないことを、両住職とも親しい私に頼んだのだと思います。

その伯父もコロナが蔓延する前に亡くなり、葬儀を行うことが出来たのですが、生前に伯父が、どのような人生を生きてきたのかを家族に話していたのかも、生前ご縁のあった方々とのことも、どのように伝えていたのかも分かりません。一周忌の法要はコロナ蔓延にて行われず、今後の法事も行われるのかも心配です。日々の忙しさの中、ある日、法名軸の中にある曾祖父の命日を見て九十年であることに気づき、本日家族で共に読経をしました。冒頭にある相田みつをさんの言葉をかみしめ、私も次の世代へ念仏申す心を繋いでいけたらと思っております。